

研究結果報告書

研究結果

1930年代の台湾で活躍した日本語作家の中で、日本の左翼文化団体との関係が密接であった人物を挙げるとすれば、楊逵（1906～1985）と吳坤煌（1909～1989）の二人であろう。彼らは、日本の左翼文化団体との交流を通じ、日本で活躍していた朝鮮人作家や中国人作家、更には多くの留学生達と緊密な交流を図っており、相互に文化的交流を行なうまでに至っている。「帝都東京」こそは、こうした彼らの交流の舞台であり、そこに住んだ経験は、彼らのその後の生活信条や考え方に多くの刺激と影響を与えることになった。このように、出身背景をそれぞれ異にする文学者や留学生達が一同に会し、交流が進むにつれ、様々な形態による東アジア独特の文化交流が生まれてきた。

筆者は、主に植民地作家としての吳坤煌の作品を掲載した日本語の文芸雑誌を研究対象として、以下の4点に的を絞って考察してみた。

- ① 日本の文芸雑誌は、植民地に生きる日本語作家達にどのような言説的空間を提供したのか。
- ② 植民地作家は、そうした1930年代発行の左翼的雑誌にどのような作品を発表したのか。
- ③ それらの作品は、雑誌の読者に植民地についてのどんなイメージーションを抱かせたのか。
- ④ こうした文化的な生産プロセスを通じ、彼らは同時代の日本プロレタリア文学界において、どのような役割を演じ、その結果、どのような文化的機能を発揮したのか。

その結果、吳坤煌という人物は、実践能力に秀でた文化活動家であったと同時に、所謂「文化翻訳」面における極めて有能な実務者として、東アジアのプロレタリア文化運動に大きな影響を与え且つ多大な貢献したことが明らかになった。彼の活躍の範囲は、台湾、中国、日本、朝鮮の合計四つの地域の文学、演劇、社会主義思想など多岐の分野にわたることが明らかになり、その多様な創作活動を通じて彼自身を「文化翻訳」の実践者たらしめていたのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

「日本における吳坤煌の文化翻訳活動について－1930年代の日本左翼系雑誌を中心とする」、王恵珍、日本：天理台湾学会第23回研究大会、2013.6.29、奈良天理市。

「日本における吳坤煌の文化翻訳活動について－1930年代の日本左翼系雑誌を中心とする」、王恵珍、韓国：日本帝国主義統治下/後の東アジア文学、2013.11.1～2、大田市KAIST。

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

「日本における吳坤煌の文化翻訳活動について－1930年代の日本左翼系雑誌を中心とする」、王恵珍、『天理台湾学報』第23号（査読中）。

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）